



難波西鶴と 海の道

【56】

森田 雅也

前回は西鶴の住む難波と海の道でつながる長崎の話でした。

今回は番外というわけではないのですが、韓国濟州島の話です。先月末より海洋と文学の調査で濟州島まで行ってきました。その余瀾として、書かせていただきます。

濟州島は海の道の交差点のような島です。濟州島を地図の中心に据えて考えれば、北は韓国本土、東は日本、西は中国、南は沖縄へと四方に海の道を介して通じているのです。これが江戸時代であれば、

李氏朝鮮、徳川幕府、明あるいは清、琉球王国への要衝ということになりました。

実は、濟州島が欧州で知られたのは意外に遅く、ポルトガル船による発見(1842年)によります。以来ケルパーツ(Quelports)として知られることになりました(『国史大辞典』)。

中央に漢拏山がそびえ、全島ほとんどが火山岩よりなるこの島は、総面積が1848平方キロメートル。これは、大阪府とほぼ同じくらいの大さきです。この島に海の道として注目したいのは、その歴史が琉球王国に似ていること

です。濟州島は、古代には耽羅と称した独立国家でした。百濟、新羅、後に高麗の支配を受けますが、朝鮮初期に至るまで隠然たる勢力を保ちました。この点が独立国家琉球王国と似ているのです。

今回訪れた「三姓穴」では、その濟州島開國伝説を学びました。高・梁・夫の三兄弟が穴から吹き出して現れたという三神人の伝説です。彼らはある日、東から流れてきた木の箱を発見します。開けてみると、箱の中には碧浪国から来た美しい3人の姫と馬などと五穀が入っており、神人たちは、彼女たちを妻として迎え、3地方に分かれて暮らすようになります。

濟州大学の先生にお尋ねすると、「碧浪国」は日本ではないかと。うれしい限りです。最近歴史上の話題になってくる、蒙古襲来を日本が打ち

交差点のような濟州島

破ることとなった遠因、叛乱軍三別抄の活躍や倭寇の問題など、濟州島の歴史は日本に何度も絡んできますが、海の道でつながっていることを思うと当然の結果です。

濟州大学の在日濟州人センターにも訪問しましたので、現在の在日韓国人の方々の歴史にも書くべきですが、何かの折の別稿として、ここでは「海の道」にこだわります。

濟州島の「海の道」で考えさせられるのは、琉球王国への漂流です。その漂流がもととなり、濟州島と沖縄の交流が行われ、沖縄の造船技術が朝鮮に伝わり、秀吉の水軍を破ることとなるのですが、紙幅に余裕がありません。またいずれかの機会に述べます。それにしても濟州島と西鶴、何か関係があっても不思議がないと確信しました。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

琉球王国の歴史と相似